

死者思い、語り続ける

歴史家の半藤一利さん



「戦争は始まつてしまえばそれまで。熱狂した民衆は制御不能です」と話す半藤一利さん

〔共同〕何度も夢に見た。焼夷弾が風を切り、「う音とともに炎がたれり狂う。うなされ叫んで目が覚めた。「忘れないけれど、消し去るわけにもいかない」と歴史家の半藤一利さん(85)。1945年3月10日未明の東京大空襲。九死に一生を得た記憶は、今も生き残り、人間ではまだ恐ろしい存在といい。

宅に焼夷弾が直撃、軍事教練の通りにバケツで消防試み、逃げ遅れた。当時14歳、炎と煙が渦巻く下町を右往左往し、川べりで猛火に囲まれた。「かんなくずのよう

に人が燃え、川に逃げた。群衆も死にものぐるい。どちらも修羅場でした」助けの船に何とか乗れたものの、水面でもがくから転落、人々にしがみつかれ、船を抱き、児童を連れた女性が進退窮まり、次々に火だるまに。夜明けに船から上がる、黒こげの死体が折り重なつていて

人が燃え、川に逃げた。人々を夢中で突き放し、び、船に助けられた。岸は地獄だった。乳児を抱き、児童を連れた女性が進退窮まり、次々に火だるまに。夜明けに船から上がる、黒こげの死体が折り重なつていて

が、車からの安全」を

防軍」や「抑止力」が国に富む。

議を醸す現代にも示唆的

内容は、「國

防軍」や「抑止力」が國に富む。

議を醸す現代にも示唆的

内容は、「國

防軍

